

『お告げどおりになった苗代の水』



有間の八幡さんの境内に、お祇園さんという神様がお祭りしてあるじゃろう、あれは、昔から天候を自由にできる靈験あらたかな神様なんじゃ。

この話は、わし自身が実際に経験した、お祇園さんに関わる不思議な大雨の話じゃ。

昭和14年のことじゃった。この年はひどい早ばつでのう、彼岸の3月21日にお湿り程度の雨が降ってから、今からお話する5月15日に不思議な大雨が降るまで、雨らしい雨はまったく降らんかった。

田植えが近くなったのに、雨がいつそ降らん。どの家でも、苗代づくりを始めたのだが、水がないために、せっかく作った苗代もすっかり乾いてしもうた。苗も、力なく萎れていた。



有間村の人たちは集まって話し合い、水当番を決めた。水当番というのは、貴重な水を

各家に分配するために、順番に当番をすることじゃ。当番は、時間を決めて、どの田にも水が公平に当たるように調節する役目だった。

だれだって自分の田には水が欲しい、そのため多いとか少ないとかの苦情がすぐ出る。また上流の村で水を取りすぎると、下流の村には水は来んようになる。そんな時には村同士の喧嘩になることもある。水当番は、気兼ねな仕事じゃった。



さて5月14日は、わしの当番でのう、前の人から、「増市さんの田に水があたっとらんけえ、増市さんの田にしっかりあててあげるように」と、申し送りを受けていた。



増市さんの苗代をみると、たしかに干上がっていて今にも苗が枯れそうだ。

「こりゃあ、大変じゃ。増市さんの田にあててあげにゃあいけん」

思うて、水をあてよつたら、向こうから増市さんが大急ぎで走ってくるのが見える。

「こりゃあいけん、増市さんが、腹を立てて来たんじゃあ。困ったことになったのう」

と置いていたら、息を切らしてきた増市さんが意外なことを言い出した。

「うちの田にゃあ、水を当てんでもええ。いやあ、うちの田だけじゃあなあ、どこの田にも水は当てんでもええんじゃ」

「当てんでもええ？なしてでしゃあ？こんなに日照り続きなのに」



「夕べのう、有間八幡のお祇園さんが、白装束姿で枕元に立たれてのう、『明日の午前三時にはどの苗代に水をたっぷり与える。安心せえ』と言われたんじゃ。たまげて目が覚めたが、もうお姿はなかった。しかし、あれは確かにお祇園さんじゃだった」

「そう言うても増市さん、こがあに毎日、毎日、日照りばかり続いとるんじや。増市さんの田んぼもカラカラじゃ。なんぼうお祇園さんの言われたことでも、にわかには信じられんよ」

「いやあ、わしゃあ毎日毎晩お祇園さんにお参りに行って、ようやく夕べにお告げがあったんじゃ。お祇園の神様が言われた言葉に千に一つの間違いはない。あんたがどうしても信用せんのならそりゃあそれでもええが、うちの田には水は要らんけえ、よその田にしっかり当ててあげてくれえ」

それだけ言うと増市さんはゆうゆうと帰っていった。





わしは困ってのう、前の当番からは、
「増市さんの田に水を当ててあげてくれえ」
言われとるじゃろう、それなのに増市さんからは
「うちの田には水を当ててくれんでもええ」
言うんじゃけえ、いったいどがあすりゃあええ

んなら思うたよ。

夕方になって次の当番の人が来たんで、相談したら、その人は
「増市さんは、昔から熱心なお祇園さんの信者だけえのう、そういうこともあるんかしらんが…、まあ増市さんが要らん云うじゃけえ、ええんじゃないんか」
いうんで、結局、増市さんの田にだけは水をあてんかった。

それじゃが、家に帰ってもわしも心が苦しうてのう。あのままなら増市さんの苗は枯れてしまうのに思うたら夜になっても寝られんかった。

そしたら、その夜のことよ。トン、トンと屋根を叩く音がする。何事かと思うて、起きて外を見てみたら、空は晴れて星が見えとるのに、雨が降りはじめたじゃないか。それは不思議な光景じゃった。そのうちにザー、ザーと大雨になり、みるみる間に乾いた大地に水がしみ込んでいく。どこの苗代からも畔から水があふれるほどになって、苗も、ピンと立ち上がってきとる。

ふと振り返って時計をみたら、たしかに午前3時頃じゃった。お祇園さんのお告げがぴたりと当たったんよ。増市さんの夢は正夢だったんじゃ。わしは、少しでも神様を疑ごうたことが恥ずかしゅうてやれんかった。



あれからは、水が欲しい時や、逆に大雨を止めてもらいたい時には欠かさず、お祇園さんにお参りに行くことにしている。たいてい願いを叶えてくださる有難い神様じゃ。じゃけえあの神さんだけは、大切に守っていかんやいけんよ。

イラスト：入澤良枝